

石ころ語りむ

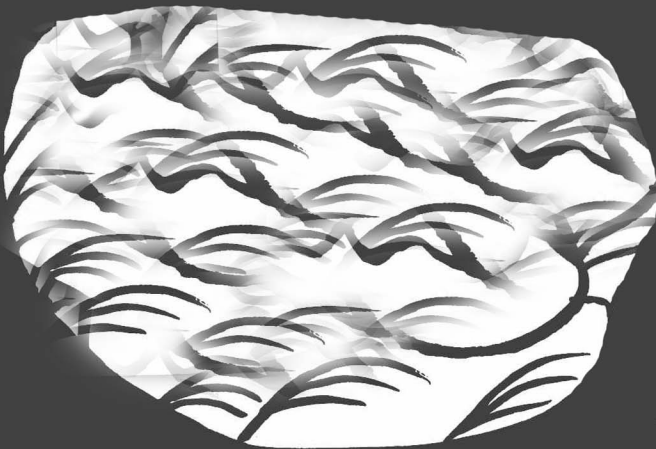
一色次郎



文化出版局

石を以て語らむ

一色次郎



一色次郎 (いっしき・じろう)

1916 年，鹿児島県大島郡知名村大字余多（沖永良部島）に生まれる。1953 年，中央公論第 3 回新人推薦に「下流から下流へ」が入選。1967 年，「青幻記」が第 3 回太宰治賞に入選，映画化。1969 年，文化出版局より『秋扇・愁魚』を出版。1974 年，『東京大空襲・戦災誌』の共同編集により菊池寛賞受賞。1975 年，『サンゴしょうに飛び出せ』により，サンケイ児童出版文化賞受賞。

石をして語らしむ

昭和五十二年九月十五日 * 第一刷発行
定価 * 九八〇円

著者 * 一色次郎

発行者 * 大沼 淳

発行所 * 文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二の一
電話 * 〇三(三七〇)三一一(代表)

郵便番号 * 一五一

振替 * 東京二一九五六七〇番
印刷所 * カバー 文化カラー印刷

本文 大日本法令印刷

製本所 * 大口製本

石をして語らしむ 目次

山陰の愛の放浪者	7
竹久夢二を埋む	29
八丈島の流入地藏	57
越前一乗谷の石仏	77
鋸山の羅漢地獄	97
大正大震災	119
化 石	143
海上道路	145
魚 売 り	148
漁夫のどれい制度	153

吹きガラス	161
パナリ焼	164
化石	167
環礁	170
粟めし	173
方言	177
南西諸島の風葬	183
続南西諸島の風葬	215
あとがき	243

装幀 太田大八

石をして語らしむ

山陰の愛の放浪者

昔、鳥取の名がまだできていなかったころ、このあたりは日本海にめんしたいちめんの沼沢地であつた。当然、水禽が多い。狩人がむらがりあつまって鳥取場をつくつたのが、いつしか住みつくようになつて部落の形ができたとき、鳥取がそのまま地名になつたといわれている。

もひとつさかのぼつて神代の昔、稲葉、伯々岐の両国は、須佐男命および大国主命の両神が相ついで統治なされた地であるが、時代がさがつて景行天皇および成務天皇の時代に国造がおかれた。

下つて国造は国府に変化する。稲葉は因幡となり、伯々岐は伯耆に變つた。因幡の国府は岩美郡宮下村、伯耆は東伯郡社村である。

六歌仙で知られた業平の兄在原行平が因幡の国府へおもむく。奨学院の設立や宍岐対馬の治政で知られるように、政治家でもあつたが兄弟そろつての歌人である。

立ちわかれいなばの山の峯に生ふるまつとしきかばいまかへりこむ

中納言行平三十八歳の作である。待つを松にかけて遠国へおもむく心もとなさをよくあらわしている。ほかに大伴家持、和氣清麿、伯耆の国司には山上憶良がいる。

大体この程度のことを前もつて説明しておかないと、これから登場する奇人の一生はとても理解

していただけそうにない。人間は、人間にかぎらないが、しょせん、環境の産物であるらしいから。奈良の法輪寺に木像のある阿保親王、平城天皇の第三皇子である。この人を父とし、桓武天皇皇女伊登内親王を母として生まれ、平安朝の華やかな御所暮らしをおくった在原中納言行平は、因幡の山の松の木のように私をいつまでも待っていてくださいよ、と女々しく涙をこぼしながら山陰路をたどったが、歌人・寒楼も若年にして『学校』にほうりこまれた。

寒楼は他国人ではない。自分の郷土である。が、素質のある人間が、好まない環境にはめこまれていくということで、通ずるところがある、とこじつけて書いているのであるが、因幡へ来ても楽な暮らしをしている行平とちがい、生活が生活だから寒楼の学校生活からは種々様々な悲喜劇が生まれる。

寒楼は最初歌を志した。

因幡よりははきの国に入りたれば伯耆大山雲をきて立つ

荒汐のしほの八百路の塩採ると大わだつみを汲んで煮てをる

東京へも行った。新聞の投句が掲載されたこともあったので選者を自宅にたずねたりしたが、褒められただけで軽く扱われた。寒楼は、中央への道を断念した。

上京前からつづけていた代用教員の生活にもどる。山陰から岡山へ抜けるまったくの谷間である。白珊瑚、海松細工、松葉蟹が名物の山陰も山合である。今も昔も花御所柿ひとつ、時は日露戦争の前後、夜はもちろん昼まも狐狸が横行したことだろう。

自分のほかには裁縫の女教師と校長、三人だけの山の小学校、おれはこんなところにいるべき人間ではない、と歯ぎしりしたところで東京は遠い。小学校を出た切りの「代用」教員では、鳥取の町へ出て行くことさえも出来ない。狐狸とともに幽閉される智頭谷は人間的檻である。

酒。奇行がつづく。酒。奇人になりたい気持ちがなくても、壇上の酔人に普通の行いが出来るわけがない。

変な先生だ。

変な先生でないわけがない。

次の学校、といっても谷の周辺を彷徨しているのであるが、どこへいっても、酒、喉が焼けて声が出なければ、講話も省略、一人々々、睨みつける、わかって呉れ、目にものを言わせるだけで降壇、誰かにあやまちがあれば自分もおなじことをしてみせる。一言、落せば割れる。目は青白くすわっている。何ものかに憑かれた目である。

今でも思い出を語る者がある。教師と思っていた者が教師ではなかった。

ぞっとする。

忘れられるわけがない。

五年、十年、山奥暮らしはつづく。どれほど酒びたりになったところで、寝間にまで匂つて来る狐の悪臭からのがれることは出来ない。寒楼は焦る。脱出をはかる。但し、前向きの方はふさがれている。

大正二年（一九一三）、当時の数え方で三十七歳、寒楼は山奥の滝を訪ねて道に迷った。どうせ酒に酔つて道を間違えたものと思われるが、人間の胸の奥底にはふと迷つてみたい本性がある。迷うのでなければ向うがわへ、つまり未知の世界へ出ることは出来ない。寒楼も一生迷う人であった。上京、というよりも東京は単なる見物におわってしまったがその上京が二十五歳、その四年前の二十一歳の、師走も大晦日近い夜、山陰海岸を十里近くもはなれた友人をたずね、帰途雪道に倒れてあやうく凍死しかけたことがある。

乗物があるわけでない。夜道をまともに歩いて帰れるものでないことくらい承知している。大雪、大柳、白い闇をちょっと避けたつもりが腰がくずれ、そのままたれていくつもりがいつしか酔夢に変わってしまう。

寒楼は白い夢をみた。

二十一の若かりし日にわがあひし細川の野の雪姫を憶ふ

いにしへゆありける我に逢着す牡丹雪ふる細川ののら

細川の流れに沿ひてふる雪の野にひろがりてゆく我をみき

逢着。

ここから寒楼一生の課題が生まれる。

川岸の白い柳、寒楼は白い着物を着た青ざめた髪の長い雪姫を待った。ほかの地方なら雪女郎である。

こんどは山の精霊を求める。

澄みわたる月のきよさよみ空より谷間にわたりおし照りてをり

おそろしきあやしきもののひかりををみるみる月の森はなれたり

白い山姥やまばなが、うしろから寒楼の肩に手をおき身にのりうつる。

さみしさに耐へて耐へねばひろげみる五本の指が五本あるかな

二度目の五本で背筋が冷えるだろう。

寒楼はよく気のふれた人間の話をした。年下の友人が書きとめた本のなかにのこっている。

「散岐^{さんぎ}にお春さんという気のおかしな女があった。どういうわけか知らんがよう遊びにくる。わしが子供のじぶんのことじゃ。お春さんがくるとみんなが、お日さんが来た、お日さんが来た、いうて、にわかに家のなかがにぎやかになった。

なにせ子供のじぶんじゃから、どうしてみんながそんなことをいうのかはじめわからなんだが、つまり、お春さんが自分で自分のことを、お日さんお日さんというとなんじやな。

気がふれても、自分をお日さん、あわれなことじゃのう。あるいは、ときたま正気にもどったんかも知れんのう。

ほれ、正気の者でもおかしゆうなりかけることがあるじゃろう。気違いさんでも、狂いっぱなしということはないだろうから、お春さんも、ときたま正気にもどって、ふっとわが身が哀れに思えたんかも知れんのう。

なに、来ても何もせん。しばらくすると座がしんとなつて、みながお春さんの顔をみる。すると、ほそい声で、何やらうたをひとつうて、すつと出ていく。ただ、それだけじゃった」

ここにはすでに雪姫の幻影が宿っている。寒楼の一生を決定づけた幻想がある。散岐も八頭街道周辺の寒村である。